

年 10 月 10-12 日、三遠南信地域を対象として多地域産業連関分析を行い、三遠南信道がもたらす経済効果を分析している。

一般共同研究 VII.

1. テーマ

人口減少時代のコンパクト都市圏における越境的サブセンターの地理学的研究
(岐阜市を中心とした周辺圏域)

2. 代表者・共同研究者・協力者（および組織）

研究代表者 久保 倫子（岐阜大学 教育学部・助教）
共同研究者 阿部 亮吾（愛知教育大学 教育学部・准教授）
林 琢也（岐阜大学 地域科学部・准教授）
田中 健作（豊田工業高校 専門学校・講師）
協力者 近藤 暁夫

3. 期間

2015 年 6 月から 2016 年 3 月まで

4. 目的

本研究は、コンパクト都市圏内でサブセンターとなりうる特定の中核都市に焦点を当て、その周辺圏域（サブセンター圏）の特徴と機能を明らかにすることを目的とする。具体的には、岐阜市を中心とした（愛知・岐阜・三重県境にまたがる）サブセンター圏の空間構造を多様な側面から実態調査し、名古屋圏がコンパクトに空間的縮小する人口減少時代において、岐阜市が果たす越境的サブセンターとしての機能を明らかにする。

5. 実績概要

8 月 31 日、岐阜市と周辺地域を回り調査対象地域の概要を理解した後、岐阜大学サテライトキャンパスにおいて第一回研究打ち合わせを実施した。11 月 27～30 日に合宿形式で集中的に現地調査を実施し、合宿後には必要に応じて各自補足調査を実施した。合宿では、

- 1) 郊外住宅地の居住・交通・買物環境の実態を明らかにするため、岐阜市郊外の加野団地での聞き取り調査を行い、合宿後に地区の全住民を対象にしたアンケートを配布した（久保・田中）。
- 2) 商業機能についての現地調査を実施した（近藤）。

3) グローバル人材の流通に関して、岐阜大学および元留学生への聞き取り調査を行った(阿部)。

4) 都市農村交流についての聞き取り調査を実施した(林)。

さらに、研究成果のまとめを行うため、2月7日に岐阜大学サテライトキャンパスにおいて第二回研究打合せを行った。

6. 今後の展開

本年度の現地調査で得られた知見をもとに補足調査を進め、越境的サブセンターとしての岐阜市の実態を明らかにし、岐阜市の実態とコンパクト大都市圏モデルにおけるサブセンターに求められる役割との比較を行い、政策提言につなげる。

また、本研究の個別の成果は、国内外の学会で発表し議論を深めた後、学術論文および書籍として公表する。地理空間学会大会(筑波大学筑波キャンパス)および国際地理学連合(IGU)の都市地理学コミッション2016年大会(上海)において、久保・駒木・田中の共同研究を発表予定のほか、名古屋地理学会の例会においてシンポジウムを開催できるよう調整している。

7. 研究内容

名古屋大都市圏のサブセンターである岐阜市を対象に各機能の実態とその圏域を検討した。その結果、越境地域政策上の問題点が明らかとなった。

(1) 日常の居住環境(狭い圏域、縮小傾向): 子の居住地、就業地、出身地などの点では越境していたが、様々なバリア(歩行環境に影響する坂や段差、バス交通の利用しやすさなど)により日常生活圏は極めて狭くなっていた⇒日常的なバリアの解消が越境性を強める鍵となる。

(2) 商業(県境をまたぐ圏域、縮小傾向): 郊外型店舗のある自治体への集約傾向が確認され、越境的なサブセンターとしての岐阜の機能が弱まっていることが明らかとなった。⇒県境を越える大都市圏全体での商業政策が求められ、それによりサブセンターとしての岐阜の機能を維持することが、岐阜を中心とする圏域、名古屋圏の発展に不可欠となる。

(3) 交通(鉄道などの大都市圏域+ミクロなバス圏域): サブセンターとしての岐阜の役割の強さが確認されたものの、日常生活レベルでは自家用車に依存した社会であり、高齢者が増加するなかで持続性に問題があった。また、圏域内を満たすバス交通の充実が日常生活圏の充実のみならず越境性を維持・発展させる上で重要である。⇒バス交通の充実により、高齢化が進む岐阜周辺圏域の日常生活圏を充実させるとともに、越境的な行動を促すことが可能となる。

(4) 余暇圏(大都市圏および岐阜周辺圏域、縮小傾向): 名古屋からの農村観光等の受け皿として岐阜中心部に程近い観光農園が機能していた。⇒名古屋圏から効果的に観光客を呼び込むための施策が必要である。

(5) グローバル人材(国際的な圏域): 学部生と大学院生では異なるキャリアパスを描いており、その結果卒業後の居住地にも差異がみられた。グローバル人材(特に既婚女性、文系など)の地元定着には課題が残った。⇒キャリア継続を支える制度とキャリア教育の充実が求められる。

現地調査が完了していないテーマもあるため、来年度も研究を継続していく予定である。また、研究成果は、順次国内外の学会等で公表する。

8. その他実績

【学会等発表】

Kubo, T., Komaki, N., and Tanaka, K. 2016. The Decline in Residential Environment in Aging Japanese Suburbs. 2016 IGU Urban Commission Meeting in Shanghai (8月15~21日開催予定; アブストラクト審査中)

Kubo, T and Mashita, M.. 2016. An increase in housing vacancies in Japanese cities: Comparison of Tokyo suburbs and old settlements. AAG 2016 Annual meeting, San Francisco, USA. (3月29日発表)

林 琢也 2016. 岐阜市長良地区にみるアグリ・ツーリズムの成立要件.

日本地理学会 2016年春季学術大会(早稲田大学)(ポスター発表: 2016年3月21日・22日)

林 琢也 2015. 「取り残される農村」は消滅してい

くのか？一郡上市和良町での「経験」とそれをも
とにした「反証」一. 地理空間学会大会(筑波大学)
(口頭発表：2015年6月20日)

【雑誌論文】

- 阿部 亮吾 2015. 名古屋圏における大学の「都心回
帰」とそのトレンド. 「地理」60(11):37-45.
- 阿部 亮吾 2015. 名古屋大都市圏における外国人
留学生の流入と定着—「アカデミックゲート」と
しての高等教育機関に着目して—. 「地理学報告」
117:1-14
- 久保 倫子 2015. 急増する都心のマンションと周辺
都市の住まいの課題. 「地理」60(11):46-53.
- 近藤 暁夫 2015. 名古屋圏の商業構造の飽和点とこれ
から. 「地理」60(11):54-61.
- 近藤 暁夫 2016. 中京大都市圏における事業所広告
活動の面的展開——屋外広告活動を中心に——.
文学論叢、第153輯:37-62.
- 田中 健作 2015. 郊外鉄道輸送からみた名古屋圏の
ゲートウェイ再編. 「地理」60(11):70-77.
- 林 琢也 2015. ふるさとを想起させる—岐阜県アン
テナショップ「g.i. Foods」にみる人口減少時代の
振興策. 「地理」60(11):62-69.
- 林 琢也 2015. 「取り残される農村」は消滅してい
くのか？一郡上市和良町での「経験」とそれをも
とにした「反証」一. 「地理空間」8(2):315-
321.